



山口県内の博物館紹介 vol.16

山口大学図書館

今回ご紹介するのは、山口大学吉田キャンパス内に位置する総合図書館です。図書館1階には常設展示スペースがあり、大学所蔵の貴重資料を展示しています。山口県の歴史を語る上で欠かせない幕末や、山口大学周辺の歴史など、展示のテーマに即した分かりやすい解説パネルも、大きな見どころとなっています。今回は、情報サービス係の岡田隆係長にお話を伺いました。

(質問) どうして図書館でこのような展示活動を始めたのですか？

岡田「最初は1～2年に1回、大学所蔵の資料を展示するだけでした。しかし、県内外から集まる学生達に、山口県や山口大学のこと、そして大学が位置する平川地区、その周辺に何があるのか、人物・歴史・地域について知ってもらいたくて、今のような形をとるようになりました。学生達に興味を持ってもらうことに重点をおいているので、解説パネルは面白く、そして分かりやすくなるように心がけています。そのおかげか、ホームページや展示をご覧になった学校の先生からの問い合わせがあり、教材として活用されたりもしています」

(質問) 現在開催されている常設展「長州藩の財政改革－明治維新に向かって－」の見どころを教えてください。

岡田「明治維新を成し遂げる一翼を担った長州藩は、維新の十数年前までは多額の借金を抱えた、赤字財政の藩でした。そんな長州藩がどのようにして財政問題を解決し、明治維新を成し遂げる力を付けたのか、財政という側面から選んだ内容となっています。この当時の長州藩の財政は、現在とマッチする部分もあるので、一体どのようにして立て直したのか、歴史から学んでみるのも面白いかもしれません」

常設展示は、学生に興味をもってもらうことに重点がおかれているということで、学外への大々的な広報はされてないそうです。しかし、展示資料や解説パネルやなど見応え十分です。在校生の皆さん、この春入学される方々、そして郷土の歴史に興味のある方は、是非一度、図書館1階常設展示コーナーに足をお運び下さい。

(乃美友香)



山口大学図書館外観



展示解説をしていた岡田係長

お問い合わせ先
山口大学図書館
〒753-8511
山口県山口市大学吉田 1677-1
TEL 083-933-5182
e-mail toshokan@yamaguchi-u.ac.jp



2009 年 冬 埋蔵文化財資料館の活動

12月 12/1 (火)～

吉田構内学生会館北側新教育棟新営予定地（吉田遺跡）にて発掘調査を開始。

1月

1/5 (月)～2月6日 (金)

吉田構内動物医療センター改修工事第1調査区(吉田遺跡)にて本発掘調査を実施。

1/23 (金)・24 (土)・31 (土)、2/5 (木)

吉田構内経済学部国際交流会館(吉田遺跡)にて立会調査を実施。

2月

2/3 (火)・4 (水)

山口大学教育学部附属山口中学校生徒2名の職場体験を受け入れ。

2/2 (月)～2/27 (金)

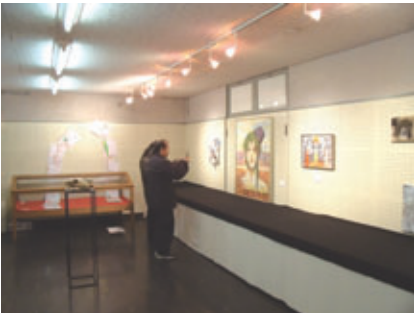
学内連携企画美術展『INSTALL A・I・A アート イン アルケオロジ』を開催(於:埋蔵文化財資料館展示室)。入館者総数74名。

2/5 (木)～3/19 (金)

吉田構内動物医療センター改修工事第2調査区(吉田遺跡)にて本発掘調査を実施。

2/18 (水) 吉田構内サッカー場防球ネット設置工事(吉田遺跡)に伴う立会調査を実施。

2/27 (金) 吉田構内教育実践センターフェンス設置工事(吉田遺跡)に伴う立会調査を実施。



学内連携企画美術展『INSTALL』展示風景



山口大学教育学部附属山口中学校生徒の職場体験



編集・発行

季刊山口大学埋蔵文化財資料館通信

第16号

『てらこや埋文』2009 春

山口大学埋蔵文化財資料館
〒753-8511 山口県山口市吉田 1677-1

【Tel/Fax】083-933-5035

【E-mail】yuam@yamaguchi-u.ac.jp

【HP】http://ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~yuam-w/Shiryoukan.home/

発行年月日 2009.3.31.

季刊 山口大学埋蔵文化財資料館通信 第16号

Elementary Archaeological Report

てらこや埋文

2009年

春



資料館 発掘調査で大わらわ!

昨年12月より、本学吉田キャンパス(山口市所在)において遺跡の発掘調査を複数実施しています。吉田キャンパスは、旧石器から江戸までのあらゆる時代の遺構や遺物が包蔵されている県内有数の複合遺跡「吉田遺跡」内に立地します。今号は、『遺跡調査特集』として、終了した調査の最新成果と現在調査中の発掘調査現場をご紹介します。

動物医療センター北側調査区(マップ調査地点1)の成果

1月初頭から2月初頭にかけて調査を実施しました。動物医療センター周辺の過去の調査では、古代(奈良～平安時代)の遺構群が確認されていましたが、本調査区では室町時代の建物群が確認されました。

200基を超える柱穴から出土する遺物はいずれも室町時代のもので、他の時代の遺構が存在しないことが特徴です。つまりこの地点では、室町時代に突如集落の形成が始まり、室町時代を通じて同じ場所に何度も建物が建て替えられ、江戸時代に至る前に集落が廃絶したということになります。それを裏付けるように、江戸時代(18世紀)の吉田村を描いた絵図を見ると、該当地点は水田となっており、集落は描かれていません。調査地周辺の土地活用の変遷を知る上で貴重な成果となりました。

動物医療センター西側調査区(マップ調査地点2)の成果

2月初頭から3月中旬にかけて調査を実施しました。調査前に周辺地の過去の調査例(動物医療センター改修に伴う調査、農学部解剖実習棟新営に伴う調査、総合研究棟新営に伴う調査)を確認したところ、本調査地点は古代の建物群が立ち並び、埋積土に多量の遺物を含む谷筋にあたるものと想定されました。その遺構や遺物を見ると、大型掘立柱建物跡や総柱建物跡、墨書土器や円面硯、製塩土器など、官衙の存在を強く想像させる資料が出土しています。新資料の出土が期待できそうです。

いざ掘削を開始すると、まさに想像通り。谷筋の左肩部が調査区の対角線上にくっきりと浮かび上がりました。さて、これからが大変。谷の落ち込みに堆積した土を1層1層丁寧に掘削しなくてはなりません。

調査を進めていくと、やはり大量の土器が出土しました。8世紀から9世紀を中心とした土器群です。また、谷底付近には大量の木製品が埋没していました。建築部材と思われる角材や板材に混ざって蓋や加工の施された棒状の製品などなど。これらの出土品を丁寧に取り上げ、資料館に持ち帰り洗浄を行うと…墨書土器が数点存在することが明らかとなりました。文字としては『主』や『井』などが判読できます。

残念ながら、谷底に顕著な遺構は発見されませんでした。官衙に関連するものと思われる資料を多数発見することができました。これらの資料の一部は、現在当館にて公開中の企画展『謎の官衙～山口大学1200年の時空を超えて～』において公開中です。吉田遺跡の最新成果をご覧いただけると幸いです。山口大学埋蔵文化財資料館へ、是非一度足をお運び下さい！

(横山 成己)



山口大学吉田キャンパスマップ



動物医療センター北側調査区(東から)



動物医療センター西側調査区 谷埋土上面検出(東から)



動物医療センター西側調査区 木製品出土状況(東から)



特別レポート

調査中の発掘現場大公開

大学会館北側調査区（マフ調査地点3）は現在調査中

昨年の12月初頭から開始した予備発掘調査に引き続き、2月中旬から本発掘調査を実施しています。

今回調査地に南接する大学会館の新営工事に伴う調査では、古墳時代の井戸や土壇、室町時代の井戸などが発見されており、丘陵の高所には多数の柱穴が確認されています(写真①)。また、遺構面を覆う包含層からは弥生時代から江戸時代までの様々な土器や石器、木製品などが出土しており、周辺地において過去に人類が活発に活動していたことを物語る貴重な資料となっています。

さて、現在(3月後半)の調査状況をご紹介します。本発掘調査の範囲は約1300㎡。遺構が検出される地山面は、東から西へと緩やかに降下しています。

写真④を見ていただくと分かるように、調査は調査区の高所に該当する東半部から進められています。調査担当者によると、大学会館調査と同様、やはり高所に遺構が密集しているとのことでした。確認された遺構は柱穴、溝などであり(写真②)、柱根が残る柱穴も確認されています。遺構から出土する遺物は中世(鎌倉～室町時代)が主体となっているようです。

また、調査区南部では石組み井戸が発見されています(写真③)。壁は小ぶりの川原石を用いて築かれており、井戸底には板材が用いられた井筒が非常に良い状態で残っています。

吉田遺跡の中世の集落構造は今まで不明確な部分が多かっただけに、貴重な調査成果となりそうです。4月下旬まで調査は継続する予定ですので、山口大学吉田キャンパスに来られる際にはぜひ遺跡見学をお楽しみ下さい。

(横山 成己)



①大学会館新営に伴う発掘調査区全景（南東から）



②検出された遺構群を掘る（南から）



③発見された石組み井戸（東から）



④大学会館北側調査区全景（南東から）



土器工房まいぶん vol. 4

粘土を低温で焼いてつくられた古代の食器や調理具を、私たちは「土器」と呼んでいます。遺跡の発掘調査で一番多く出土するのが、この「土器」と呼ばれる古代人の道具です。つまり、土器は古代の人々の「生活必需品」だったのです。それでは、土器はどのような方法でつくられていたのでしょうか？ このコーナーでは弥生時代の土器づくりの方法を紹介していきます。

覆い焼き②

今回は窯づくりの方法をご紹介します。今回はその続き、点火から焼き上がりまでの手順をご紹介します。土器づくりの総仕上げとなるため、点火から焼き上がりまでの約20時間、目を離すことのできない重要な作業です。

①点火孔に火を入れる



②約20時間後・・・



③焼き上がり



火を入れてからおおよそ12時間前後で、最高温度(約700～800℃)に達します。その間燃料を燃やし続けることが重要です。燃えている間は空気孔から煙が出ているので、煙の出が悪くなったら、うちわなどであおぎ空気を送り込みます。燃料が燃え尽き、最高温度に達する頃には、表面を覆った赤土も焼けて変色しています。その後は赤土自体が高温を保ち、窯内部の急な温度変化を防いでくれます。

成功すると鮮やかな橙色に焼き上がります。所々に見える黒い部分は「黒斑」と呼ばれ、比較的低温の低い、地面や窯に触れているところで見られます。

(乃美友香)



やまぐち遺跡発見ものがたり Vol. 1

このコーナーは、山口県内を代表する遺跡の発見経緯をご紹介します。今回紹介するのは萩市唐津(旧阿武郡須佐町唐津)に所在する須佐唐津古窯跡群。遺跡は昭和59年(1984)に山口県の史跡に指定され、現在も窯跡を見学することができます。

す さ から つ こ よ う せ き ぐ ん

須佐唐津古窯跡群

陶芸が趣味の方ならご存じでしょうが、山口県には古くより「須佐焼」と呼ばれる陶磁器が存在しました。その焼き物は製品としての存在は知られていたものの、長らく「謎の陶磁器」として様々な憶測をよんでいた。その理由は、須佐焼を生産したと伝わる集落が江戸時代に火災に遭い、陶工の過去帳や文書類が消失してしまったことや、昭和に入り、須佐焼の陶工が旧萩市内に転出してしまったことによるそうです。一方、須佐では「古須佐は青磁なり」という言い伝えがあり、地元に伝わる陶磁器の中には中国や朝鮮半島でつくられた青磁と見紛うばかりの優品が存在していました。昭和30年代には、これらが須佐焼か、大陸からの伝来品かで大論争が繰り広げられるに至りました。

この状況を打開すべく、昭和38年(1963)より地元の有志が分布調査や試掘調査を行い、窯跡の特定に挑みました。この取り組みは、多くの陶磁器片とともに青磁の破片が多数出土する地点の確認という形で実を結び、昭和41年(1966)から3年間、小野忠熙氏(当時：山口大学教授)、小田富士雄氏(当時：九州大学助手)等を調査員とする本格的な発掘調査が実施されることとなりました。調査の結果、3基の連房式登り窯と2ヶ所の物原(失敗作などを捨てた場所)が発見され、最古の窯である3号窯の物原の下層からは…「まぼろしの須佐青磁」の破片が多数出土したのです！

この歴史的な発見により、遺跡が操業当初(江戸時代初頭)から青磁を生産していた日本最古級の窯跡であることが立証されました。窯跡は、郷土の貴重な文化財として保存され、現在でもその姿をとどめています。

(横山成己)



周辺地図



山口県指定史跡『須佐唐津古窯跡群』



調査時の姿をとどめる第3号窯